

鑑賞の手引き

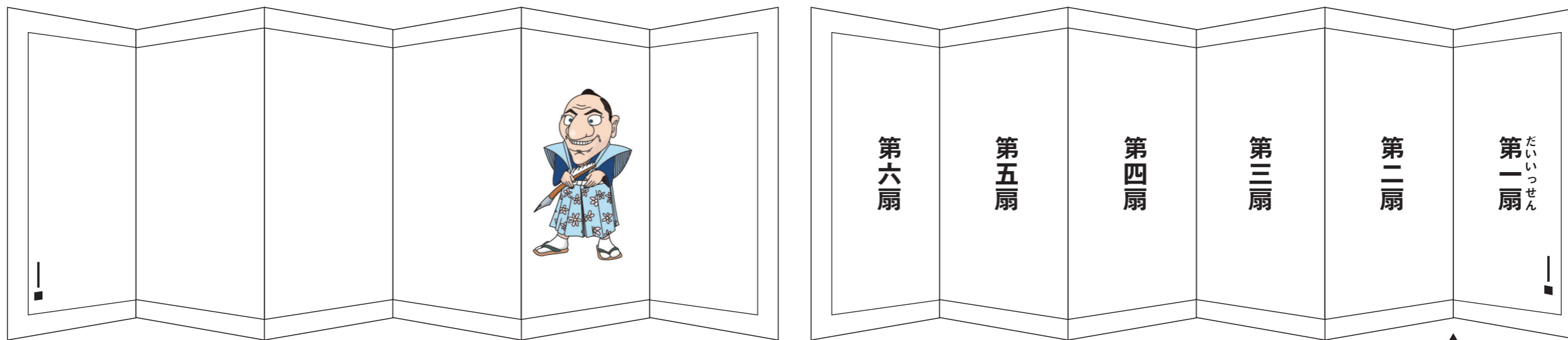
作品解説に書いてある、

「六曲屏風一双の左隻の第二扇」ってなあに？！

ろっきょくいっそう
六曲一双

させき
左隻

うせき
右隻



らっかん いんしょう
落款・印章

かみちょうつがい
紙蝶番 (各扇をつなぐ役目)

屏風 (びょうぶ) は、本来は、風よけの家具で、室内の間仕切りとして用いられました。「屏」には、「ついたて。おおい。目かくし。」「しりぞく。しりぞける。」といった意味があります。「風」を「退ける」(屏)。「屏風」の二字はその本来の用途を私たちに教えてくれます。

扇 (せん) とは屏風のひとつの画面のことと考えてください。屏風は一般に縦長長方形の木枠に紙や布を貼り構成されますが、その一単位を扇 (せん) といいます。これを二扇、四扇、六扇、八扇、十扇とつなぎ合わせて折りたためるように調えたものが屏風です。ちなみに、各扇を示すときは、右から第一扇、第二扇、第三扇…、と呼びます。

曲 (きょく) には「まがる。まげる。」といった意味のほかにも「くみ (組)。」という意味もあります。屏風の数え方で言うと、折りたたむ画面の数が二扇であれば二曲屏風、四扇であれば四曲屏風、六扇であれば六曲屏風となります。現存作例からすると、六曲屏風が圧倒的に多数派です。

双 (そう) は「ふたつで一組のもの」を指すことばで、つまり対 (つい) になっているもののことを指します。英語で言うと、pair (ペア) です。「双」は旧字では「雙」と書きます。「佳」(ふるとり) がふたつで「雙」と覚えてください。ペアではない屏風を数えるときには「隻」(せき) を用います。二隻の屏風がペアでひとつの作品である場合、それを「一双屏風」といいます。向かって右が「右隻」(うせき)、向かって左が「左隻」(させき) です。

落款・印章 (らっかん・いんしょう) について。一双屏風の向かって右が右隻で左が左隻と言っても、どうやって右左を判断するのでしょうか。《四季花鳥図屏風》のように春夏秋冬を描くものは、春夏が右隻、秋冬が左隻です。時間は右から左へと流れるのです。《源平合戦図屏風》の場合、時系列からして、一の谷合戦が右隻、屋島合戦が左隻になります。加えて、落款と印章も、右左を判断するのに役立ちます。落款とは絵師のサイン、印章はハンコのことです。落款や印章は一隻の右端か左端に書かれたり捺されたりすることが多く、左側

に落款や印章があればそれを左隻とみなします。もし落款や印章がなければ、図様から判断しますが、右左を入れ換えても図様がつながるように計画して描かれる作品もあり、右左の判断がつかない (判断の必要がない) こともあります。

紙蝶番 (かみちょうつがい) は屏風の各扇をつなぐ役目を果たすものです。紙蝶番の工夫により屏風が大画面を獲得し、それにより室町時代以降に屏風が大いに普及したといっても過言ではありません。紙蝶番を採用する以前の屏風、たとえば正倉院に伝わる奈良時代の屏風は、各扇の周囲に裂を取り回すことで各扇が独立し、それらを革紐で結ぶことで連結されていました。紙蝶番の発明により各扇の縁取りが不要になったため、六扇ひと続きの大画面が誕生したのです。

では、「六曲屏風一双の左隻の第二扇」とはどこでしょうか——。皆様ならもうお分かりでしょう。そうです！当館営業部長の「パンチの守 (かみ)」が描かれた扇がそれにあたります。これでもう大丈夫。ごゆっくり展示をお楽しみください。